

是的構文への素性継承アプローチ*

郭 楊^{*1}・廣江 顕^{*2}

^{*1}長崎大学（非常勤講師）

^{*2}長崎大学 言語教育研究センター

A Feature-inheritance Approach to the *Shi . . . de* Construction in Chinese Language

Yan GUO ^{*1}, Akira HIROE^{*2}

^{*1} Nagasaki University (part-time)

^{*2} Center for Language Studies, Nagasaki University

Abstract

In this paper, we will point out that Paul and Whitman's (2008) analysis faces several challenges in the relevant respects, and argue that, as in Guo and Hiroe (2020), *de* in the Chinese *shi . . . de* construction is a sentence particle, categorized as a complementizer (C^0), with an aspectual specification. Moreover, the mechanism that induces a focal interpretation on the subject of the *shi . . . de* construction can be captured in such a way as to fit into the phase theory (Chomsky (2001, 2008)), where agreement-features are assumed to be inherited from C^0 to T^0 at a certain stage of derivation. However, we will propose that in the construction, [focus], a discourse-related feature, is inherited from *de* to T^0 , which is contingent on the inheritance of agreement features.

Keywords: 是的構文、文助詞、素性継承、焦点解釈、フェイズ理論

1. はじめに

本論では、郭・廣江 (2020)（以後、郭・廣江）で分類した、中国語のいわゆる「是的構文」を扱い、同じ構文を扱った Paul and Whitman (2008)（以後、P&W）が提示した分析で生じる問題点を指摘する。次に、是的構文の主語あるいは付加詞が

有する焦点解釈を生じさせるメカニズムを、Chomsky (2001, 2008) の「フェイズ理論 (phase theory)」の枠組みに位置付ける試みを行う。さらに、アスペクト性を担う文助詞「的 (*de*)」(sentence particle) を他の文助詞と比較することでその分布特性を明らかにし、中国語における右方周辺部 (right periphery) における統語構造地図 (syntactic cartography) の解明の一端に寄与したい。

生成文法において、是的構文に関しては、記述的・理論的考察を行ったものがこれまで少なからずあったものの (e.g. Cheng (2008), Chiu (1993), Huang (1982, 1988), Paris (1979), Simpson and Wu (2002), Tang (1983), and Teng (1979)), 是的構文そのものの分類や整理が十分に行われているとは言い難く、¹ 下位構文や方言変異等も含めた是的構文全体を一括して扱ってしまう結果となっている。

そのなかで、P&W は、是的構文に関する様々な事実を整理し、郭・廣江で取り上げた是的構文と同じ構文を “*shi ... de pattern proper*”、*shi* が単独で生起している構文を “*bare shi*” とそれぞれ呼び、考察の対象としている。本論では、以下(1)で例示されているような是的構文を扱うものとする。(1)の構文は、P&W で言うところの “*shi ... de pattern proper*” と同一のものである。

- (1) a. (Shi) Xiaoyong ca de heiban.
 (是) 小勇 擦 的 黑板
 shi 勇さん 拭く de 黑板
 ‘黑板を消したのは勇さんだ’
- b. (Shi) Xiaoyong kan de shu.
 (是) 小勇 砍 的 树
 shi 勇さん 切断する de 木
 ‘木を切ったのは勇さんだ’

本論の構成は、次の通りである。第2節では、先行研究としてP&Wと郭・廣江を取り上げ、P&Wが是的構文に関して提示する分析には、いくつかの理論的・経験的問題点があることを指摘する。第3節では、フェイズ理論の枠組みで是的構文が示す特性に説明を与える試みを行う。フェイズ理論で仮定されている「素性継承 (feature-inheritance)」のメカニズムでは、補文化辞から時制を担う T^0 へ、一致に関する素性 (agreement feature) が継承されると考えられているが、本論では一致に関する素性の継承のみならず、談話素性 (discourse feature) である焦点素性 [focus] も継承されるとの提案を行う。第4節は、結語である。

2. 先行研究

是的構文は、これまで主に記述的文法書の類で言及されているものが多いなか、² 生成統語論で扱われた先行研究として、Paul and Whitman (2008) を取り上げ、P&W の分析の理論的・経験的問題点を指摘する。また、是的構文の統語的・意味的特性だけを考察の対象とした、郭・廣江 (2020) が提示する分析及び考察と P&W のそれとを比較検証する。

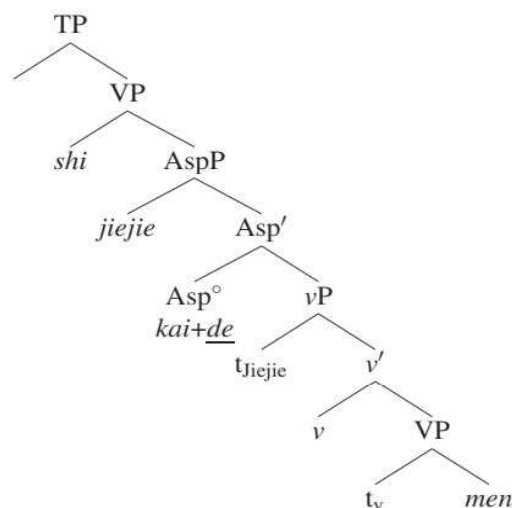
2.1. Paul and Whitman (2008)

P&W は、下記(2)で例示されているような是的構文のタイプを “*shi ... de pattern proper*” と呼び、(3)のような特性があると主張している。

- (2) a. Shi ta jiejie kai de men.
Be 3SG elder.sister open DE door
‘It was her elder sister who opened the door.’ (subject focus)
(Paul & Whitman (2008: 429))
- b. Lu Xun shi shenme shihou xie de A Q?
Lu Xun be what time write DE A Q
‘When was it that Lu Xun wrote A Q?’ (Adjunct focus)
(ibid.)
- (3) a. It is a cleft: It obeys the exclusiveness condition and focuses an element in a designated position.
b. The presupposition may not contain material generated above vP.
c. Constituents other than the subject and adjuncts may not occur in the designated focus position.
d. *de* is associated with [past] tense. (ibid.)

(3)の特性を踏まえて、P&W では “*shi ... de pattern proper*” と呼ぶ構文は分裂文の構造になっており、(2a)と(2b)それぞれが、下記(4)と(5)のような構造になっていると仮定している。まず、主語に焦点解釈がある(4)の構造に関する主張から見てみよう。

(4) Subject focus cleft



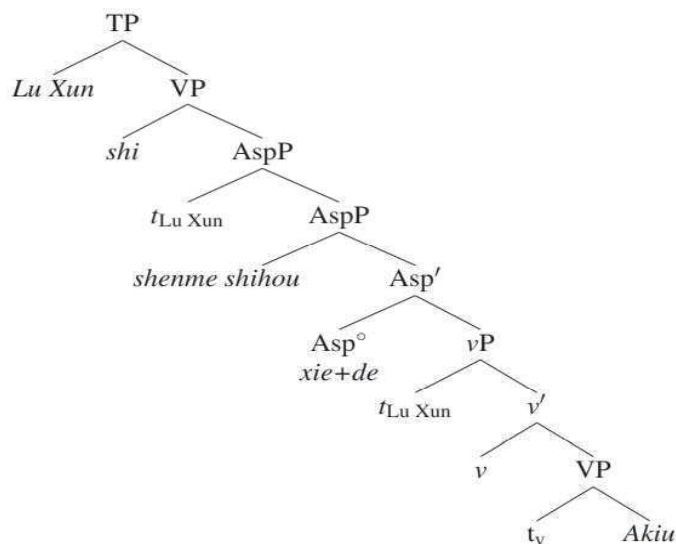
(ibid.: (436))

(4)の構造で重要なのは、*de* が相 (aspect) の投射構造 (AspP) の主要部であり、その AspP は「是 (*shi*)」によって選択されている点である。このように仮定すると、当該構文の前提 (presupposition) 部分に、上位の VP より高い位置に生起する法助動詞や相助動詞、また否定要素が含まれない (=2a)と(2b)) ことが説明できるとし、さらに、是的構文には過去の解釈があるが、*de* の語彙的意味の一部である [Past] 素性によりその解釈が担保される (=2d))、と P&W は主張する。

具体的な派生としては、(4)において、*kai* ‘open’ が vP 投射構造の V に基底生成され、その後 *v* に付加され、そこから最終的に AspP の主要部 Asp⁰ に付加される (Lin (2001))。一方、vP の指定辞に基底生成された主語 *jiejie* ‘elder sister’ は、Asp⁰ が持つ EPP 素性あるいは OCC 素性により (Chomsky (2004))、AspP の指定辞の位置に移動し、最終的に、上位の VP の指定辞にある *shi* から格付与され、主語の焦点解釈は PF での *shi* との隣接性により与えられるとする分析を提示している。

次に、付加部 *shenme shihou* ‘what time’ に焦点解釈が生じている(5)の派生を見てみよう。主語の *Lu Xun* は、vP の指定辞に基底生成され、AspP の指定辞に移動するところまでは(4)と同じだが、その後 T⁰ と素性照合が行われ、T の EPP 素性により TP の指定辞へと最終的に移動する。

(5) Adjunct focus cleft



(ibid.)

P&W の分析には、理論的な瑕疵があると考えられる。その点から見てみよう。まず(4)で、下位の V が v に付加され $[V+v]$ になり、その後 Asp^0 に付加される。つまり、この場合の移動は理論的に主要部移動であることから $[V+v+Asp^0]$ となり、 $[kai+v+de]$ というアマルガムを形成しているはずだが、*kai de* と膠着型にはなっておらず、事実とは異なる。

2 点目に、(4)の主語は *shi* より格付与されるとしているが、その根拠が述べられていない。

3 点目に、(5)における主語 *Lu Xun* は $AspP$ の指定辞の位置から T が持つ EPP 素性により TP の指定辞の位置へと最終的に移動すると分析されているが、(5)では *shi* による格素性の付与はなぜ行われなかったのかという疑問が生じる。

次に、経験的事実という面でも問題があることを見てみよう。P&W は “*shi...de pattern proper*” 構文の *shi* 「是」は、否定辞「不（～ない）」と共起可能なこと、それに A-not-A 疑問文の A 要素になれることから、*shi* は *copula* であると論じている。確かに *shi* が *copula* ならば、その前に否定辞の「不（～ない）」が付くことも A-not-A の形もいずれも可能である。以下の例を観察してみよう。

- (6) a. Xiaoyong bu shi daxuesheng.
 小勇 不 是 大学生。
 勇さん ～ない copula 大学生
 ‘勇さんは大学生ではない’

b. Xiaoyong shi bu shi daxuesheng?

小勇 是 不 是 大学生?

勇さん copula not copula 大学生

‘勇さんは大学生ですか?’

しかし、そのような場合がすべて copula だとは限らない。(7)に示されているように、中国語の形容詞も同様の振る舞いが可能である。

(7) a. Zhangsan bu gao.

张三 不 [形容詞 高]。

張三 ～ない 高い

‘張三は背が高くない’

b. Zhangsan gao bu gao?

张三 [形容詞 高] 不 [形容詞 高]?

張三 高い ～ない 高い

‘張三は背が高いんですか?’

さらに、P&W では、“*shi...de pattern proper*” 構文に生起する *shi* は、コピュラ文の「是」と同様、省略が可能であると述べている。しかし、(8)に示されているように、コピュラ文の「是」は省略できない。

(8) a. Kai men de shi ta jiejie.

开 门 的 是 他 姐姐。

開ける ドア de copula 彼 姉

‘ドアを開けたのは彼の姉さんだ’

b. *Kai men de ta jiejie.

开 门 的 他 姐姐。

開ける ドア de 彼 姉

(8)の事実は、“*shi...de pattern proper*” 構文の *shi* が copula であるという P&W (2008) の主張の反例になると考えられる。

次に、是的構文の主語の焦点解釈は、*shi* と主語との PF での隣接性により保証されるとの主張を P&W は行っているものの、意味解釈は（少なくとも現在のミニマリストプログラムの枠組みでは）統語部門で構築された構造形式が C-I インターフェイスを通して読み取られる際に行われるものである。したがって、PF での隣接性によ

り生じると P&W が主張する分析では、焦点解釈が保証できない。

以上、本節では、P&W が提示した分析には、理論的にも経験的にも瑕疵があることを見てきた。次節では、郭・廣江 (2020) が提示した事実と分析を再訪し、是的構文に対する分析を P&W の分析と比較・検討するものとする。

2.2 郭・廣江 (2020)

本節では、郭・廣江 (2020) を概観し、郭・廣江がどのように Paul and Whitman (2008) の問題点を論じているかを概観する。

「的」については、朱 (1978) をはじめ、袁 (2003) や杉村 (1982) など、多くの先行研究で、「的」の後には主要部名詞が省略されており、「的」は動詞句を名詞化する名詞化接辞(nominalizer)だと主張されてきた。

(9) “小王是昨天晚上来的。” (朱 (1978))

しかしながら、是的構文における「的」が名詞化接辞であるとする分析には、二つの問題があることを郭・廣江では指摘した。1 つ目は、もし(9)の「的」が名詞化接辞であれば、(10)が copula 文であることが予想されるが、(10)で示されているように、(9)は copula 文ではない。

(10) Xiaowang zuotian wanshang lai de.
 小王 昨天 晚上 来 的。
 王さん 昨日 夜 来る de
 ‘昨日の夜来たのは王さんです’

(郭・廣江 (2020:40))

(9)の「的」が名詞化接辞だとすると、「的」の後ろに当該名詞節の主要部「人」が省略されていると考えられるが、(9)を観察すれば、「人」だけでなく、copula の「是」まで省略されていると言わざるをえない。しかし、中国語の copula 文にとっては、「是」は義務的である。

「的」が名詞化接辞と分析する際のもう一つの問題点は、(11)と(12)のような目的語の「票 (チケット)」がある文で浮かび上がる。

(11) Xiaowang zuotian wanshang mai de piao.
 小王 昨天 晚上 买 的 票。
 王さん 昨日 夜 買う de チケット

‘王さんが昨日の夜チケットを買ったんです’

(ibid.)

(12) [N Xiaowang] shi [NP zuotian wanshang mai piao de ren].

小王 是 昨天 晚上 买 票 的 人。

王さん shi 昨日 夜 買う チケット de 人

‘王さんが昨日の夜チケットを買った人なんです’

(ibid.)

(12)が copula 文であることは明らかなが、(11)を(12)と同じ構造だとみなすのには、語順の点から言っても無理があるとの主張を行った。

以上、是的構文の「的」が名詞化接辞であるという分析には問題があることを見てきた。動詞の直後（あるいは目的語の前）に「的」が生起している場合、明らかに名詞化接辞ではない。では、「的」はいったいどういう範疇であろうか。

郭・廣江 (2020) では、以下のような事実をもとに、「的」は文助詞であるとの分析を提示した。

(13) a. Xiaowang he de kele.
小王 喝 的 可乐。
王さん 飲む de コーラ
‘王さんが（あの）コーラを飲んだんです’

b. *Xiaowang he kele de.
小王 喝 可乐 的。
王さん 飲む コーラ de

(郭・廣江 (2020: 41))

「的」が生起する位置は、完了の相助詞「了」と同じく、原則、動詞の直後に限定されている。また、「的」を含む普通の S V O 語順の文の意味解釈は、イベントの完了にしかない。よって、「的」は未来や一般現在を表す時間副詞の「一会儿（のちほど）」や「总是（いつも）」とは共起できない。

(14) a. *Xiaowang yihuier he de kele.
*小王 一会儿 喝 的 可乐。
王さん のちほど 飲む de コーラ

b. *Xiaowang zongshi he de kele.
*小王 总是 喝 的 可乐。

王さん いつも 飲む de コーラ

(ibid.: 43)

しかも、完了の aspect 「了」は、イベントの状態が完了していることだけを表すのに対し、「的」は完了だけでなく、イベント前に比べてイベント後に、何かの状態が変わることを表わしている。さらに重要なのは、その変化をもたらしたのは誰なのかを指摘する、focus 解釈が必要であるという点を議論した。

(15) A: Fasheng le shengme?

发生 了 什么?

起きる le なに

‘なにが起こったの?’

B: #Xiaowang kan de shu.

小王 砍 的 树。

王さん 切断する de 木

‘王さんが木を切ったんです’

(ibid.)

3. 新しい分析

本節では、前節及び郭・廣江 (2020) で得られた是的構文に関する経験的知見をフェイズ理論の枠組みに位置付ける試みを行う。前節では、(13)と(14)の事実をもとに、「的」は完了を表す相 (aspect) 助詞の「了」と同じように、文の右方周辺部に生起するという分布特性を示し、「的」が用いられている場合にのみ主語に焦点解釈が生じていることを観察した。この点を踏まえると、以下の例でも示されているように、「的」も「了」と同じく、相を担う文助詞と考えるのが自然だろう。

(16) a. Xiaoyong ca de heiban.

小勇 擦 的 黑板。

勇さん 拭く de 黑板

‘黑板を消したのは勇さんだ’

b. Xiaoyong ca le heiban.

小勇 擦 了 黑板。

勇さん 拭く le 黑板

‘勇さんは黑板を消した’

文助詞というのは、少なくとも中国語における生成文法の理論的研究というコンテキストでは、これまで補文化辞 (C^0) と分析されてきた (e.g. Hun-tak Lee (1986), Paul (2009, 2014), among others). Rizzi (1997) は、補文化辞層 (CP-layer) 一般に関する階層構造を以下のように提案した。³

(17) Rizzi's (1997) CP-layer

Force >(Top) >(Foc) >(Top) > Fin

Paul (2009, 2014, 2015) は、(17)における階層構造が中国語の場合も当てはまるかどうか検討を行なっている。以下の例を観察してみよう (Q: question-marker; IMP: imperative)。

(18) a. Ta bi ye le ma /*ma le?

3SG finish study C Q Q C

‘Has she graduated?’

b. Kuai dinar zou ba.

Fast a bit walk IMP

‘Walk a bit faster (please)!’

(Paul (2015:(4)-(5)))

(18a)で観察されるように、*le*「了」と疑問マーカの *ma* の語順は決まっている。

「了」は完了を表す文助詞なので、(17)の *Fin* に、*ma* は疑問マーカなので *Force* に、それぞれ相当すると考えられる。また、(18b)で観察されるように、軽い程度の命令文マーカの *ba* も *Force* と考えられる。このような事実から、Paul (2015) は、以下のような中国語における補文化辞層を提案し、(18a)で「了」が占める位置を *Fin* ではなく、*Low C* と呼んでいる。

(19) Paul's (2015) CP-layer

Low C < Force

さらに、Paul は中国語の補文化辞構造では、話し手あるいは聞き手に関連する、いわゆる談話関連の投射構造を仮定する必要があると主張し、以下のような例を挙げている (ATT: attitude) (cf. Haegeman (2014), Haegeman and Hill (2013))。

(20) Bu zao l'ou [le + ou] /*[ou le]. Kuai zou b'ou [ba + ou] /*ou ba

NEG early LOWC+ATT fas go FORCE+ATT
 ‘It’s already late! Hurry up and go!’

(Zhu Dexi (1982: 208))

(20)では、warning reminder を表す文助詞 *ou* が生起する位置は、LowC それに Force よりも上位の位置であることが分かる。この事実を(19)と合わせて、Paul は最終的に以下のような階層構造を提案している。

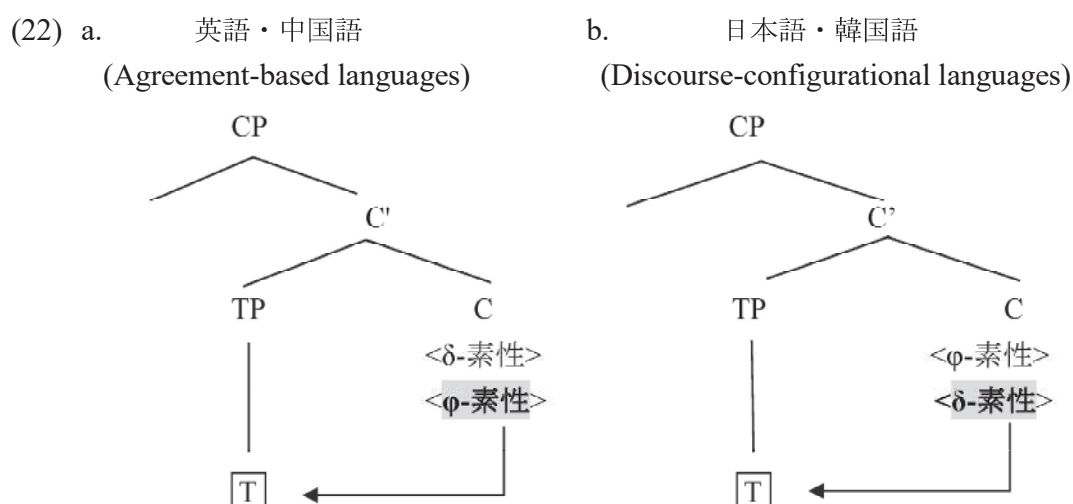
(21) Chinese CP-layer

Low C < Force < Attitude

さて、本論で考察の対象としてきた「的」は、(21)のいずれの要素であろうか。「的」が「了」と相補分布をなすこと、アスペクト解釈がある (郭・廣江 (2020)) という 2 点から考えれば、LowC に属する要素であると考えられる。

最後に、主語に焦点解釈があることを如何にして保証するかを考えてみよう。2.1 節で、P&W の分析では、「是」が当該主語と PF において隣接することで焦点としての解釈を保証する分析を概観し、その分析は、反循環的 (counter-cyclic) な操作を仮定するという点で問題であることを指摘した。そこで、フェイズ理論の枠組みにおける素性継承を用いて説明を与えたい。

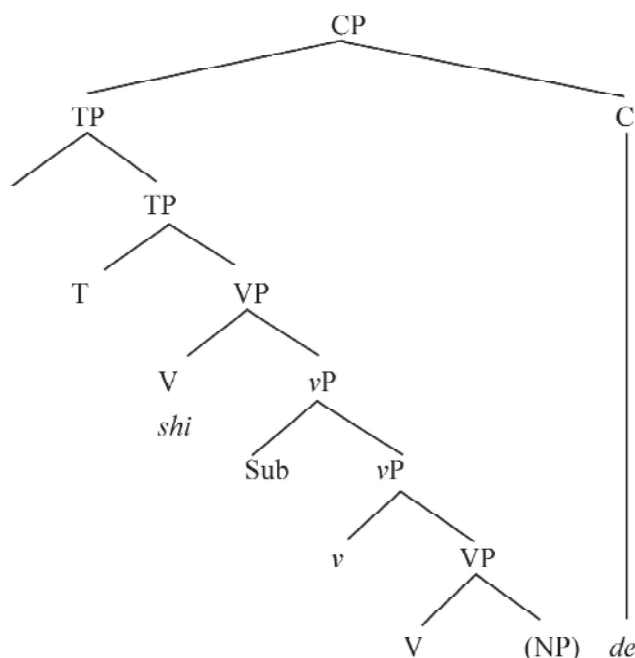
フェイズ理論では、補部化辞 (C^0) が派生に導入され、外的併合 (external merge) が行われた場合、 C^0 が時制を担う T^0 に素性継承を行う仕組みとなっている。例えば、Miyagawa (2017) では、以下のような素性継承を仮定している。



(22)で、 δ -素性は、談話における焦点やトピックに関わる素性、 ϕ -素性は一致素性で、例えば、英語の主語と T の一致、日本語における丁寧体の主語との一致などに関わっている素性である。

しかし、だからといって、Miyagawa は、(22a)タイプの言語では ϕ -素性、(22b)タイプの言語では δ -素性だけが継承されると主張しているわけではなく、(22a)では δ -素性、(22b)では ϕ -素性が素性継承されることも許容している。本論では、「是」ではなく、「的」という LowC が、(他の一致素性に加えて) T^0 に [focus] という素性を継承すると仮定する。

(23)

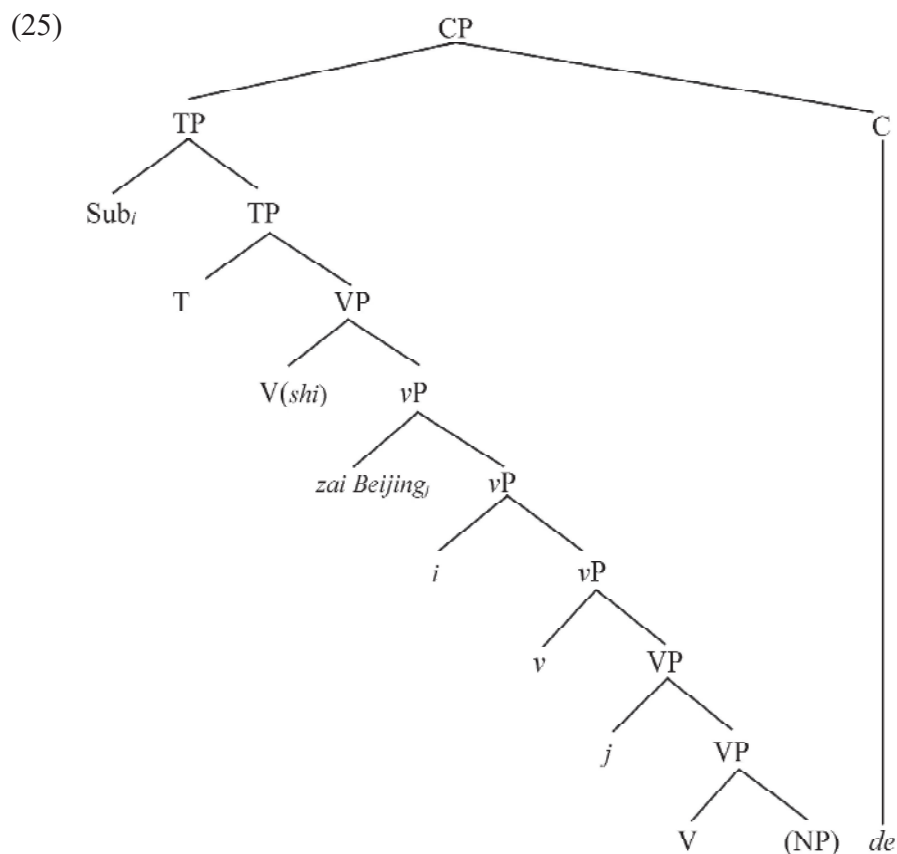


素性継承により T^0 に与えられた [focus] 素性は、 T^0 と主語の一致操作 (Agree) に付随する形で与えられる。具体的には、 T^0 の最小探索 (minimal search) により vP の指定辞にある主語と一致素性に関する値付与 (value assignment) が行われるのと同時に、談話素性の [focus] 素性が与えられる。この分析では、統語部門において、主語がすでに [focus] 素性を持っていることから、C-I インターフェイスで読み取られ、主語に正しく焦点解釈が生じることになる。

ここで、英語と異なるのは、英語の場合、主語は T^0 の端素性 (edge feature) により最終的に TP の指定辞に移動するが、是的構文の主語に焦点解釈が生じる場合、2.1 節で観察したように、その場合の主語は TP の指定辞の位置に移動せずに vP の指定辞の位置に留まる。つまり、T には端素性がないということを意味している。

次に、付加詞に焦点解釈が生じている場合を見てみよう。

- (24) Ta shi zai Beijing xue yuyanxue de.
 3SG be at Beijing learn linguistics de
 ‘It’s in Beijing that he studied linguistics’



(25)で、(23)と同様に、C から T への素性継承により、一致に関する素性と焦点素性 [focus] が T に与えられる。下位の VP の指定辞に基底生成された *zai Beijing* が、T より [focus] 素性を付与され、vP の指定辞という端 (edge) 位置に v の端素性により移動する。ここでも、焦点解釈が生じる主語の場合と同様に、T は端素性を持たないため、*zai Beijing* はその位置に留まる。一方、(25)の主語は、(23)の場合とは異なり、基底生成された位置から T の端素性により、TP の指定辞の位置に移動する。

本分析の骨子は、「的」が中国語において LowC である文助詞という仮定だが、「的」が Force でも Attitude でもないとすると、是的構文をより上位構造に埋め込んだとしても、Force や Attitude を担う文助詞とは異なり、その作用域は当該節を超え

ないことが予測される。事実、その予測は正しい。以下の例を観察してみよう。⁴

- (26) a. Xiaowang shuo shi xiaoyong ca de heiban.
 小王 说 是 小勇 擦 的 黑板。
 王さん 言う shi 勇さん 拭く de 黑板
 ‘王さんは、黑板を消したのは勇さんだと言っている’
- b. Xiaowang renwei shi xiaoyong ca de heiban.
 小王 认为 是 小勇 擦 的 黑板。
 王さん 思う shi 勇さん 拭く de 黑板
 ‘王さんは、黑板を消したのは勇さんだと思っている’
- c. Xiaowang jianshi shi xiaoyong ca de heiban.
 小王 坚持 是 小勇 擦 的 黑板。
 王さん 主張する shi 勇さん 拭く de 黑板
 ‘王さんは、黑板を消したのは勇さんだと主張している’
- d. Xiaowang xiaoshengshuo shi xiaoyong ca de heiban.
 小王 小声说 是 小勇 擦 的 黑板。
 王さん ささやく shi 勇さん 拭く de 黑板
 ‘王さんは、黑板を消したのは勇さんだとささやいている’
- e. Xiaowang xiangxin shi xiaoyong ca de heiban.
 小王 相信 是 小勇 擦 的 黑板。
 王さん 信じる shi 勇さん 拭く de 黑板
 ‘王さんは、黑板を消したのは勇さんがだと信じている’

(26)では、是的構文がさまざまなタイプの動詞に選択される節に埋め込まれたものだが、是的構文の作用域は埋め込み節を超えてはいないことが分かる。

4. 結語

以上、本論考では中国語の是的構文を扱い、Paul and Whitman (2008) が提示する分析の問題点を指摘し、是的構文の「的」を文助詞、具体的には、中国語の補文化辞体系における LowC として分析を行った。次に、位相理論における素性継承において、「的」が T^0 に一致素性と談話素性である焦点素性を付与するという提案を行った。その場合、是的構文の主語が焦点になる場合は、主語と T^0 間で Agree 関係を結び、値付与を行う際に、その操作に付随する形で、焦点素性が主語に与えられる。一方、付加詞が焦点になる場合は、一致素性に関する操作とは別に、T が付加詞に焦点素性を付与するというメカニズムで捉えられるとの主張を行った。

本論の意義は、これまで是的構文における焦点解釈を「是」に帰する多くの分析とは異なり、文助詞「的」が焦点解釈を生じさせているとの主張を裏付ける新しい事実を提示し、フェイズ理論の枠組みで捉え直した点にある。

残された課題は、是的構文の場合、主語であれ付加詞であれ、焦点として解釈される場合に、T に端素性が無く、vP の端に留まる理由が明らかではないことである。中国語の場合、vP フェイズ内に焦点構造の層がある可能性もあるが、いずれにせよ今後の研究の課題としたい。

謝辞

* 本論は、令和 2 年 7 月に開催された福岡言語学会第 2 回例会にて発表したものを大幅に修正・加筆したものを部分的に含んでいる。例会では、フロアーからは多くの有益なご質問をいただいた。ここに感謝申し上げる。

註

1. 同様の指摘が P&W でもなされている。
2. 詳細は、郭・廣江 (2020) を参照。
3. Rizzi (1997) は、経済性の観点から、話題要素あるいは焦点要素が生じた場合にのみ、C⁰は(17)のような構造が投射されると主張している。
4. 叙実動詞の補文に是的構文を埋め込んだ場合、以下(i)で観察されるように、容認性が下がるようである。

- (i) a. ^{??}Xiaowang zhidao shi xiaoyong ca de heiban.
 小王 知道 是 小勇 擦 的 黑板。
 王さん 知る shi 勇さん 拭く de 黒板
 ‘王さんは、黒板を消したのは勇さんだということを知っている’
- b. ^{??}Xiaowang buganxin shi xiaoyong ca de heiban.
 小王 不甘心 是 小勇 擦 的 黑板。
 王さん 悔しい shi 勇さん 拭く de 黒板
 ‘王さんは、黒板を消したのは勇さんだと悔しがっている’
- c. ^{??}Xiaowang houhui shi xiaoyong ca de heiban.
 小王 後悔 是 小勇 擦 的 黑板。
 王さん 後悔する shi 勇さん 拭く de 黒板
 ‘王さんは、黒板を消したのは勇さんだと後悔している’

(i)において、(26)と比較して容認性が低下している理由は、叙実動詞の補文は「前

提」になっており、それが是的構文の聞き手が前提としていない焦点と、語用論的な矛盾が生じているためだと考えられる。本論では、この問題にはこれ以上立ち入らないものとする。

参考文献

- Cheng, Lisa Lai-Shen and Rint Sybesma (2006) *A Chinese relative*. In *Organizing Grammar. Linguistic Studies in Honor of Henk van Riemsdijk*, Hans Broekhuis, Norbert Corver, Riny Huybregts, Ursula Kleinhenz, and Jan Koster (eds.), pp. 69–76. Berlin: Mouton.
- Chiu, Bonnie H.-C. (1993) *The inflectional structure of Mandarin Chinese*, Ph.D. dissertation, UCLA.
- Chomsky, Noam (2001) “Derivation by Phase,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2004) “Beyond explanatory adequacy,” *Structures and Beyond*, Adriana Belletti (ed.), 104–131. Oxford: Oxford University Press.
- Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria L. Zubizarreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, MA.
- 袁毓林 (2003) 「从焦点理论看句尾“的”的句法语义功能」『中国语文』第1期：3-16.
- Haegeman, Liliane (2014) “West Flemish verb-based discourse markers and the articulation of the speech act layer,” *Studia Linguistica* 68, 1, pp. 116-139.
- Haegeman, Liliane and Hill, Virginia (2013) “The syntacticization of discourse,” in *Syntax and its limits*, Raffaella Folli, Christina Sevdali, and Robert Truswell (eds.). Oxford: Oxford University Press, pp. 370-390.
- Huang, C.-T. James (1982) *Logical relations in Chinese and the theory of grammar*, Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Huang, C.-T. James (1988) *Shuo shi he you* (On shi and you), *Bulletin of the Institute of History and Philology* 59, part 1: 43–64.
- Hun-tak Lee, Thomas (1986) *Studies on quantification in Chinese*, University of California at Los Angeles, PhD diss.
- 郭楊・廣江顕 (2020) 「「(是) NV 的 (N)」構文における「的」の統語的特性と意味解釈」『長崎大学言語教育研究センター論集』第8号, pp. 36-51.
- Miyagawa, Shigeru (2017) *Agreement beyond Phi*, MIT Press.
- Paris, Marie-Claude (1979) *Nominalization in Mandarin Chinese*, Paris: Département de Recherches linguistiques, Université Paris 7. Shi . . . de focus clefts in

- Mandarin Chinese 451.
- Paul, Waltraud (2005) “Low IP area and left periphery in Mandarin Chinese,” *Recherches Linguistiques de Vincennes* 33, pp. 111–134.
- Paul, Waltraud, and John Whitman (2008) “*Shi* . . . *de* focus clefts in Mandarin Chinese,” *The Linguistic Review* 25, pp. 413–451.
- Paul, Waltraud (2009) “Consistent disharmony: Sentence-final particles in Chinese,” unpublished ms., CRLAO, Paris. (Available at: <http://crlao.ehess.fr/index.php?177>)
- Paul, Waltraud (2014) “Why particles are not particular: Sentence-final particles in Chinese as heads of a split CP,” *Studia Linguistica* 68, 1: pp. 77–115.
- Paul, Waltraud, and Victor Junnan Pan (2015) “Why Chinese SFPs are neither optional nor disjunctors,” *Lingua*, vol. 170, pp. 23–34.
- 朱德熙 (1978a) 「“的”字结构和判断句 (上) (下)」『中国语文』第 1 期 : 23–27.
- 朱德熙 (1978b) 「“的”字结构和判断句」『中国语文』第 2 期 : 104–109.
- Simpson, Andrew and Zoe Xiu-Zhi Wu (2002) “From D to T—determiner incorporation and the creation of tense,” *Journal of East Asian Linguistics* 11: 169–209.
- 杉村博文 (1982) 「中国語における動詞の照応形式」『日本語と中国語の対照研究 6』大阪外国語大学.
- Tang, Ting-chi (1983) “Guoyu de jiaodian jiegou: fenlieju, fenlie bianju yu zhun fenlieju (Focusing constructions in Chinese: cleft sentences and pseudo-cleft sentences)” In *Universe and Scope. Presupposition and Quantification in Chinese*, Ting-chi Tang, Robert L. Cheng, and Ying-che Li (eds.), 127–226. Taipei: Student Book Co.
- Teng, Shou-Hsin (1979) “Remarks on cleft sentences in Chinese,” *Journal of Chinese Linguistics* 7(1): 101–114.
- Zhu, Dexi (1982) *Yufa jiangyi* (On grammar), Beijing: Shangwu yinshuguan.